

日本中世自筆典籍の誤記に関する書誌學的研究

プロジェクト代表者:武井和人(埼玉大學・教養學部・教授)

1 研究スタッフ

〔研究代表者〕 教養學部・教授・武井和人

2 補助金等獲得の現状

①平成18～20年度・科学研究費補助金・基盤研究(B)「室町後期禁裏本の復元的研究」

〔課題番号:18320039〕※研究代表者:武井和人

②平成19～21年度・科学研究費補助金・萌芽研究「日本中世自筆本の書誌學的研究に關する方法論的研究」〔課題番号:19652016〕※研究代表者:武井和人

3 研究経過および成果

本年度は、以下の調査・研究を行つた。

①國立國會圖書館藏一條兼良・冬良兩筆『連珠合璧集』の調査・撮影、及び研究

本年度は、編者自筆本の一つの典型として、國立國會圖書館藏一條兼良・冬良兩筆『連珠合璧集』を調査・撮影し、その古典籍としてのありやうを徹底的に考究することを通して、編者自筆本の持つさまざまな問題点を剔出し、その上で、自筆本における誤記發生の基礎的條件を考察した。

その結果、該本は、複數人による書寫・書き入れ等が複雑になされてゐることが判明し、まづ、それらの意圖を正確に把握することが喫緊の課題であることを浮き彫りにすることが出來た。また、何を以て「誤」と認定するうか、といふより根源的な問題が存することも、併せて指摘することが出來た。

以上のことがらは、廣く自筆本一般においてあらはれうる現象と目され、その意味でも、本研究の意義はあつたと判斷される。

本項目における研究成果を、以下の如く發表した。

武井「室町後期自筆本攷(一)―國會圖書館藏兼良冬良筆『連珠合璧集』―」

(『研究と資料』58、2007・12) p13～25

②『秋萩帖』における闕脱に關する調査・研究

東京國立博物館藏・國寶『秋萩帖』は、古來、轉寫本ではあるものの、(書寫時期に關しては諸説あるとしても)編者自筆本の姿を限りなく正しく保存してゐると(専ら書道史研究において)考へられて來たものである。即ち、事實上自筆本と見做して良い典籍である。ところが、仔細に本文を検討してみると、機械的な誤寫、乃至、物理的缺損と斷ずるには餘りにも數多くの、かつ、根源的な本文上のキズがあることが分つた。その多くは闕脱で

あり、その結果、（見かけ上、といふ限定はつけざるをえないものの）多数の《字足らず歌》が生み出されしまつてゐる。しかし一方、これらのキズは、轉寫の過程において起きてしまつたものでなく、恐らくは、編者自筆本において發現してゐたであらうことも、しかるべき蓋然性をもつて豫見された。

この典籍において、本研究の當初の目途である「自筆本の誤記」の問題が明確な形で現れて來たことになり、また、問題点の絞り込みも可能となつたと判斷する。

本項目における研究成果を、以下の如く發表した。

武井「秋萩帖攷ー〈字足らず〉歌論のためにー」

（久保木哲夫編『古筆と和歌』〔笠間書院、2008・1〕所収） p 63～78

4 關聯する研究成果

以下の論文を發表した。

武井「中書攷」（『研究と資料』57、2007・7） p 31～42

5 今後豫定される研究計劃

①中世自筆本の繼續的調査・研究

平成20年度は、宮内廳書陵部に所藏される一條兼良自筆典籍を調査・撮影し、『連珠合璧集』と同様の視點・方法を以て、研究を試みる豫定である。具體的には、以下の典籍を調査することにしてゐる。

北畠家連歌合（下巻一冊、兼良自筆判）

源氏物語不審條々（一軸、兼良自筆）

いづれも、翻刻・影印は備はるものの、徹底した書誌研究はなされてゐない。まづは、そのあたりからの検討にならう。

②科學研究費補助金による研究プロジェクト

本研究をより深化させるために、科研費による共同研究を目指し、平成21年度における採擇を目指す。「古典籍書寫と書寫環境の相關性」といふ研究テーマをとりあへず設定し、關聯する先行研究、研究資料の豫備的調査を進めてゐるところである。